

【参考】「時代に逆行する図書館行政」舞鶴市民新聞 令和6年5月17日掲載

“時代に逆行”する図書館行政

経済の高度成長の時代は去り、少子高齢化が叫ばれ、人口減少が切実となるこれからの時代。もはや“大きいことは素晴らしい”と言うのは時代遅れです。しかし、当市では単に大きな図書館を夢見ること、近隣市町村からもあこがれられる大きな図書館にするとして、新しい「中央図書館」の建設が動きだしている。

しかも、東舞鶴と西舞鶴の2地域の複眼都市として発展してきた当市の歴史を無視して、東舞鶴の図書館を廃止して、その蔵書を西舞鶴の図書館の蔵書と合わせて一箇所に集め、蔵書の多さを誇りたいようだ。そのためにどうしても東の図書館の廃止は譲れない方針として計画は動き出している。これは、“時代に逆行”する政策と言わざるを得ない。

そもそもこの図書館政策は、カリスマな前市長が、自らのレガシーとして計画したものと聞いているが、そのことを十分に議論・検討もせず、チェックしてこなかった市議たちの無能さも原因の一つとして考えられるが。行政にも重い責任があると指摘できる事柄でもある。これらの誤りの政策については、さまざまに指摘できるが、その指摘すら行政は、盾つく反対者として排除しようとしている。しかも市議たちは、その内容すら認識できないようで、いまだ寝言を言っている状態で、それらの意見すら理解できないでいるようだ。

将来人口の減少が見込まれる時代は、単に大きいことよりも、寄り添いが重視されるべきだ。つまり、大きいことよりも地域住民の利便性が優先されるべきだが、当局は地域に密着している東図書館を廃止して、遠距離に大きな「中央図書館」を建設することで、東地域住民には大変不便な、大きな図書館にあくまでこだわる方針であり、とにかく計画を見直す動きはなく、未だに高度成長期の夢から覚める気配は見当たらない。

しかも当局は、隣町に新築された図書館を見て、“隣の芝は青い”とのがあこがれを持つ声をたよりに、新「中央図書館」の建設予定地の近隣住民の意見などのほんの一部市民の声を理由に、計画を正当化しようとしている。この結果、市民の約半数の人口の東地区に、図書館はなくなるという極めて不適切かつ公平性を欠いた状態であり、“時代に逆行”するものとなっている。

あこがれを持つ気持ちは誰にでもある気持ちはあるが、現実世界では、あこがれをそのままでは実現できないのが当たり前である。あこがれを実現するためには、現実との調整が重要であるが、あこがれをそのまま実現しようとした幼稚な思い上がり、計画と現実の齟齬を生みだしている。この世であこがれを、そのまま実現できるのは「のび太」くんの漫画の世界だけである。つまり当局は、議会とともに、漫画の世界で夢を見て遊び呆けている。漫画の世界のような思考の状態のまま「中央図書館」を夢見ることから目を覚まし、未来志向で現実をしっかりと踏まえて計画を再構築することが肝要だ。

リスクを最小限に食い止めるためにも、立ち止まって緊急に計画を見直すことは、最優先にしなければならない重大事項である。遊びに使うほどの少額の前算規模の案件ではない。